千漢連会報

書中自ずから美人あり！

副会長　八嶋溪風

十周年記念大会プログラムで、「漢詩づくりの面白さ」というテーマで石川忠久先生の講演と、鷲野会長司会による座談会がなされました。

大変有意義な一日であり、その話や経験知の発表に深い感銘を覚えたと、多くの人から好評を得ました。嬉しい限りです。私も触発されるところ大で、感想というか普段、何となく思っていたことをまとめて、巻頭言にかえさせて頂きます。

中国では「書中自ずから美人あり」という言葉があるが、これは、子供への勉強動機づけの文言ではないかと愚考しています。「腹中書あり」というのもありますが、人間の腹の中に好きな格言の一つや、歴史上の人物の本を入れておけということかと理解しています。腹中の書をどう考えたらよいでしょうか？

物事を前にすすめて、問題解決する能力には、『素質　×　知識　×　経験　＋　意欲』の四要素が必要と言われます。

○素質は誰もが持っているが、その潜在能力を引き出すこと、つまりその潜在エネルギーを引き出すことが問題解決を高めるというわけ。

○知識も業務知識（専門）と一般教養的なものがあるが、いずれも書物から得るのが多い。

○経験にも、直接、間接の経験があるが、間接経験には見聞と読書とがあって豊かになる。

以上の三つは、どれか一つでもゼロならば、三つがゼロになってしまいます。ただ、意欲だけは別物といわれます。

漢詩づくりを考える時、「書中自美人」になるには、次のことが重要です。

・漢字にめぐり合う為に、たくさんの書物（詩文）を読まなければならない。

・潜在エネルギーを引き出すためには、書を読んで出会いの契機とし、経験を多くもち詩作して、達成感を味わい、視野を広くする。

・意欲は「憤せざれば啓せず、悱せざれば発せず」、やはり、根を深く培養して、麦が徒長しないようにすることも大切だということ。

・座談会では、漢詩づくりの創造的、クリエイティブな面、精神活動への言及、本当の個性というものへの指摘が時間の都合でできなかったのが惜しまれる。

我々の表、すなわち社会生活というもの（経済至上主義）から隠れている裏の潜在面、すなわち精神生活というものに、漢詩づくりが、どんな役割・機能を果たしているのか、考えてみなくてはならないでしょう。

平生、どういう理想を持っているか、ただ、漫然と過ごすのではなく、一つの理想あるいは目標を持っていること、これを志というなら、「詩は志なり」が、何となく響いてきます。

詩吟道・詩作道なるものがあるとすれば、創業垂統の根本精神に返り、絶えず新しく出直してゆくという「反本復始」という言葉もまた、心構えとして忘れてはならないでしょう。よく言われる「もと」を大事にすることです。

千漢連のこの会報も、洛陽の紙価を高める編集努力が継続的になされることが期待されており、「美人」を得る一助になれば幸いです。

第十一回総会開催

千葉県漢詩連盟第十一回総会が平成二十七年六月四日（木）十三時十五分より船橋市中央公民館五階大会議室において開催された。出席会員数二十九名（他に委任状三十四名）だった。

清水理事の司会のもとに議長に宮崎三郎氏が選出され粛々と議事の審議に入り、前年度の業務報告と決算報告、及び当年度の業務計画と予算案等の議案はすべて原案通りに承認された。また、理事として、青木智江さんが新たに選出された。

鷲野会長からは、今年は、九月十二日に十周年記念大会を行い、更に会員拡大を目指して若い方々につなげるよう頑張りたいとの挨拶があった。ここで総会は滞りなく終了した。

鷲野会長の講演が午後二時から「漢詩の楽しみ－作詩のための漢詩鑑賞－」と題して、行われた。

鷲野翔堂会長講演
「漢詩の楽しみ
－作詩のための漢詩鑑賞－」

講演中の鷲野会長

第十一回総会終了後、鷲野正明会長による表題の記念講演が行われました。その講演の要旨を以下に紹介します。カラーの図もありましたがその説明は省略します。また分析の例として挙げた詩もたくさんありましたがそれも省略して、一首だけを以下に紹介します。

【講演要旨】

今年の私自身（鷲野）のテーマは、「かんしをかんじる」である。去年は「持つべきものは友だちと辞典」だった。漢詩は読んで日本語に翻訳して意味が分かった、というだけではいけない。作者のことば使いや構成を吟味し、ことばで表現されていない作者の息遣いや意図を探り、詩そのものを詩として「感じ」なければならない。

例として晩唐・高駢の「山亭夏日」を読んでみよう。

山亭夏日　　晩唐　高駢

緑樹陰濃夏日長　緑樹陰濃やかにして夏日長し
楼台倒影入池塘　楼台影を倒しまにして池塘に入る
水晶簾動微風起　水晶の簾動いて微風起こり
一架薔薇満院香　一架の薔薇　満院香し

口語訳は「緑の木々が濃い影を落とし、夏の強い日差しはいつまでも続く。池の面には楼台がさかさまに映っている。ふと水晶のすだれが揺れ、そよ風が吹くと、バラの香りが庭いっぱいに漂った。」となる。これで内容はわかる。しかし、これで終わるのでは詩を楽しむことにはならない。楽しみはこの先にある。句ごとにさらに見てみよう。

起句は、ギラギラといつまでも焼けつくような夏の日差し。だからこんもりと繁った木々の影がくっきり黒々と地面に落ちる。承句は、楼台の影が鮮やかに映っていることから、無風状態であることがわかる。これは、転句の「微風起こる」を読んで確信することになる。しかも水辺という設定だから、起句の流れから、ジットした蒸し暑さだ。

転句。水晶の簾がサラサラと鳴り、そよ風が吹いた、と。因果関係からすれば、そよ風が吹いて簾が動くのであるが、起句・承句のような状況、つまり、風もなくすべてが死んだような蒸し暑さのなかで、頭もボーとしていて、ほんの微かな音ではっとした、ということが理解できる。

結句は、そよ風に乗って、棚に咲くバラの花の香りが庭いっぱいに漂ったことをいう。「一」と「満」によって、一気に爽やかな香りが漂ったのであり、これで蒸し暑さも一気に消し飛んだことをいう。水晶の簾の音を聞き（聴覚）、その揺れているさまを見（視覚）、「微風」を感じ（触覚）、バラの花の香りをかぐ（嗅覚）、と五感（四感だが）に訴えて涼しさを詠うのである。

前半は、頭がボーとする蒸し暑さ、だから後半のほんのわずかな風でも涼しく感じる。しかも人の感覚に訴えて詠う。一字たりともゆるがせにしない緊密さをもった絶妙な詩、ということができよう。私たちは詩を作るとき、「暑い」と言い、雷がなり雨が降って「涼し」くなった、などと言いがちだが、この詩のように「暑」「涼」の字がなくてもそれを表現することができるのである。

この詩を読んで、蒸し暑さと涼しさと、バラの花の香りを「実感」できたであろうか。作詩の楽しみは、まず名作を読むことから始まる。作者の選んだ一字一字を吟味し、句の作り方、全体の構成を研究し、何度も読み味わいながら「実感」する。その「感じる」という感覚を養

うことで、さらに詩を読む楽しみが広がる。
　そして、実は、作詩のコツはここにあるのだ。ことばや構成のしかたは数多く作詩すれば自然と身につく。大切なのは、詩人としてのセンスであり、それは「感じる」ことから身につくのである。

＊＊＊＊＊＊＊＊

（ご参考）資料の漢詩を付記しておきます。

一、解釈と「読み」

贈汪倫　　盛唐　李白

李白乗舟將欲行　李白舟に乗りて将に行かんと欲す
忽聞岸上踏歌声　忽ち聞く岸上踏歌の声
桃花潭水深千尺　桃花潭水深さ千尺なるも
不及汪倫送我情　及ばず汪倫の我を送るの情に

山亭夏日　　晩唐　高駢

緑樹陰濃夏日長　緑樹陰濃やかにして夏日長し
楼台倒影入池塘　楼台影を倒しまにして池塘に入る
水晶簾動微風起　水晶の簾動いて微風起こり
一架薔薇満院香　一架の薔薇　満院香し

望湖楼酔書　　北宋　蘇軾

黒雲翻墨未遮山　黒雲墨を翻して未だ山を遮らず
白雨跳珠乱入船　白雨珠を跳らせて乱れて船に入る
巻地風来忽吹散　地を巻き風来って忽ち吹き散ず
望湖楼下水如天　望湖楼下水天の如し

二、風景と詩人と読者の関係・・・・省略

三、風景の描き方

涼州詞　　盛唐　王翰

葡萄美酒夜光杯　葡萄の美酒　夜光の杯
欲飲琵琶馬上催　飲まんと欲すれば琵琶
　　馬上に催す
酔臥沙場君莫笑　酔うて沙場に臥すとも
　　君　笑ふこと莫かれ
古来征戦幾人回　古来　征戦　幾人か回る

送元二使安西　　盛唐　王維

渭城朝雨浥軽塵　渭城の朝雨軽塵を浥し
客舎青青柳色新　客舎青々　柳色新たなり
勧君更尽一杯酒　君に勧む更に尽くせ一杯の酒
西出陽関無故人　西のかた陽関を出づれば故人無からん

早發白帝城　　盛唐　李白

朝辞白帝彩雲間　朝に辞す白帝彩雲の間
千里江陵一日還　千里の江陵一日にして還る
両岸猿声啼不住　両岸の猿声啼いて住まざるに
軽舟已過万重山　軽舟　已に過ぐ万重の山

寄揚州韓綽判官　　晩唐　杜牧

青山隠隠水遥遥　青山隠々　水遥々
秋尽江南草木凋　秋尽きて江南草木凋む
二十四橋明月夜　二十四橋　明月の夜
玉人何処教吹簫　玉人何れの処にか吹簫を教うる

山行　　晩唐　杜牧

遠上寒山石径斜　遠く寒山に上れば石径斜なり
白雲生処有人家　白雲生ずる処人家有り
停車坐愛楓林晩　車を停めて坐ろに愛す楓林の晩
霜葉紅於二月花　霜葉は二月の花よりも紅なり

江楼書感　　晩唐　趙嘏

独上江楼思渺然　独り江楼に上れば思ひ渺然たり
月光如水水連天　月光は水の如く水は天に連なる
同來翫月人何処　同に来りて月を翫びし人は何れの処ぞ
風景依稀似去年　風景は依稀として去年に似たり

四、「おもい」の生まれるとき

取思―外界のモノをたずね求め、モノから思いを取得する

生思―ゆくりなくモノと応じあって、ふと思いを生じる

感思―前人のことばや作品をよく味わい吟詠しているうちに感じて思いを生じる

題烏江亭　　晩唐　杜牧

勝敗兵家事不期　勝敗は兵家も事期せず
包羞忍恥是男兒　羞を包み恥を忍ぶは是れ男児
江東子弟多才俊　江東の子弟才俊多し
捲土重来未可知　捲土重来未だ知るべからず

―漢詩創作紀行―
春の吟行会―鋸山から館山へ―

鷲野正明

吟行会の楽しみは、参観場所を散策し歴史を学び、詩材を得て詩興をたかめることにあるが、詩材・詩興を得るのは参観場所に限ったことではない。そこへの往復の道をゆっくり歩くことで、参観場所以上に豊富な詩材とさまざまな感興が得られるのである。町並みはどうか、家の造りはどうか、庭の花はどうか、とキョロキョロ見ながら歩くのが楽しいのである。ごく普通の日常に眼を向けることが詩作には大事である。脇目もふらず、あるいは話に夢中になって参観場所へ行くだけでは、もったいない。

さて、今回の吟行会は平成27年4月30日から5月1日にわたって行われた。江戸時代の大沼枕山や梁川星巌の詩を研修会で取り上げていたので、是非とも行って見たいと思っていた所である。参加者は17名。全員で鋸山を散策し、昼食後、日帰りの6名と分かれ、11名は白浜で一泊した。初日の午前中は少し曇っていたが移動した館山では好天に恵まれ、山や古い町並みを歩くのも心地よく、電車やバスの時間待ちもない充実した吟行会だった。幹事の相沢無有氏、清水蕗山氏の周到な計画に感謝したい。

活動はおおよそ以下のようであった。

4月30日（木）

10：30　内房線浜金谷駅に集合　徒歩でロープウエイ乗り場へ

11：20　鋸山頂上着　記念写真を撮ったあと各自散策

12：45　鋸山大仏前広場集合　下山

13：30　駅の近くの食堂で昼食　柏梁体連句に取り組む

日帰り組は14：53の千葉行きで帰宅

宿泊組は

14：25　内房線で館山へ

16：50　バス　白浜野島崎灯台で下車し、厳島神社を参拝ののち灯台見学。朝日と夕陽の見える岬を散策

17：20　白浜町のライズリゾートホテル着

18：00　夕食　夜は有　志で反省会

5月1日（金）

07：30　朝食

09：00　バス　館山へ

09：50　城山公園へ。館山市立博物館見学。城の天守閣から館山湾と富士山を眺める

11：10　バスで館山駅へ電車で那古船形駅へ

11：30　那古船形駅着　徒歩で那古寺へ「明月庵」で昼食

12：20　徒歩で大福寺へ　崖観音を見学予定だったが修復中で見られず

13：35　那古船形駅から千葉駅へ。

14：35　千葉駅で解散

待ちに待った吟行会。遅刻してはなるまいと、4月30日（木）、津田沼駅8時26分発の館山行き電車に乗る。千葉駅での乗り換えがなく眠って行けるだろうという考えは甘く、乗り込んだ車輌は木更津駅で切り離され、後ろの車輌へ移動するはめに。15輌編成の前11輌が切り離され、うしろの4輌が館山へ向かったのであった。

9時47分、浜金谷駅着。相澤無有氏と冨樫貞華氏も同じ電車だった。集合時間までには間があるので、相澤氏等は昼食場所を探しに、我々は散策がてらフェリーの発着場へ。

浜金谷の駅から徒歩10分ほどで鋸山ロープウエイ乗り場へ。ぎゅうぎゅう詰めのゴンドラで頂上へ。標高三二九メートル。全員で記念写真を撮ったあとは各自で自由散策。われわれは頂上の展望台で保田海岸等を写真に撮ったあと西口管理所まで下り、拝観料六〇〇円也をお布施してから「十州一覧台」へ。急峻な石段を登り浅間神社へたどり着くと風が涼しく心地よい。少し休憩したのち一気に下って、こんどは少し上って「百尺観音」を拝観。そして「地獄のぞき」の奇巌を下から眺める。少し戻って再び急峻な石段を登って「地獄のぞき」へ。「百尺観音」前の人々が小さく見える。山頂展望台で遠望したのち石段を下りながら石仏を拝観。千五百体あるという羅漢をすべては見きれないので集合場所の大仏前広場まで下り、日本一の大仏を拝観。藤の花やツツジが咲いていた。「呑海楼」へも行ってみたいと思っていたが、これは次回の楽しみにとっておくことに。全山を見尽くすには三日は必要か。

鋸山　五首

山巓眺望　山巓眺望

元名海岸保田湾　元名の海岸　保田の湾
岩井大房連館山　岩井　大房　館山連なる
一覧百常巓石上　一覧す　百常巓石の上
利新島嶼白雲間　利新の島嶼　白雲の間

十州一覧台　十州一覧台

大空不看石階悠　大空看えず石階悠かなり
五級徐昇忽又休　五級徐に昇って忽ち又休む
拭汗遠望神廟畔　汗を拭い遠く望む神廟の畔
白雲接処十州幽　白雲接する処　十州幽なり

百尺観音　百尺観音

巨岩中断作天門　巨岩中断して天門を作す
小径蒸苔歩歩昏　小径苔を蒸して歩々昏し
深谷豁然光達処　深谷豁然として光達する処
観音俯瞰救幽魂　観音俯瞰して幽魂を救ふ

不到呑海楼　呑海楼に到らず

三天宜要鋸山遊　三天宜しく要すべし鋸山の遊
半日登巓看十洲　半日巓に登って十洲を看るのみ
羅漢一千猶未拝　羅漢一千　猶ほ未だ拝せず
何尋呑海負名楼　何ぞ尋ねん呑海名を負ふの楼

羅漢　羅漢

問君坐此幾星霜　君に問ふ此に坐して幾星霜なる
観念森羅万象長　森羅万象を観念して長し
往昔文人今悪去　往昔の文人　今悪くに去る
詩中留思放清香　詩中思ひを留めて清香を放てり

遅めの昼食のあと、宿泊組は電車で館山へ行き、さらにバスで白浜野島崎灯台へ。灯台の手前の厳島神社には人類繁栄のための立派なご神体が安置されてある。

野島崎厳島神廟　野島崎厳島神廟

遠訪房州白浪湄　遠く訪ぬ　房州　白浪の湄
荘厳浄域更存祠　荘厳たる浄域　更に祠を存す
君看男女常尊物　君看よ　男女常に尊ぶ物
子子孫孫必永滋　子々孫々　必ず永く滋からん

午後4時を回ったため灯台に登ることはできず、「伝説の岩屋」を見たり「房総半島最南端の碑」を見たり、「朝日と夕陽の見える岬」の碑から海を眺めたりした。この一帯の岩は波に洗われておもしろい形をしている。その根方や隙間に可憐な花が咲いている。白浜という地名だが、岩は黒い。

白浜町野島崎　白浜町野島崎

房州海角最南端　房州の海角　最南端
朝日夕陽容易看　朝日　夕陽　容易に看る
花発奇巌相畳裏　花は発く　奇巌相畳むの裏
紫黄紅白戦春寒　紫黄紅白　春寒に戦く

翌5月1日（金）快晴。歩くと暑い。まずバスで館山の城山へ。昔、ここに天守閣があったかどうかは不明だが、昭和58年に里見氏ゆかりの地の象徴として建設された。天守閣の展望台から波が静かで鏡のような館山湾、一名鏡ヶ浦を望む。遠く富士山も見えた。

館山城望鏡浦　館山城より鏡ヶ浦を望む

直上四層君主楼　直ちに上る四層　君主の楼
欄干独倚鏡湾悠　欄干独り倚れば鏡湾悠かなり
白雲不動是何故　白雲動かざるは是れ何故ぞ
富士山巓冠雪浮　富士山巓　雪を冠して浮かぶ

館山城は館山市立博物館の分館で『南総里見八犬伝』の資料館となっている。周辺には見所がたくさんあるが博物館の本館だけを見学してバスで館山駅へ。電車に飛び乗り那古船形駅へ。県道富浦館山線を館山方面へ八〇〇メートルほど歩くと那古寺がある。県文化財に指定されている観音堂と多宝塔は修復工事中で「銅造千手観音立像」（重文）も拝観できなかった。

境内の北寄りに急峻な階段があり、どうやら県道に出られる近道のよう。そこでゆっくり階段を下りると中頃に鳥居があり、小さなお堂と「閼伽井」の跡があった。閼伽井は霊験あらたかで万病に効くというので、水を汲みに参詣したり、安房路を巡る旅人がこの霊水で渇きをいやしたりしたという。

閼伽井　閼伽井

昔是山腰小径傍　昔は是れ山腰小径の傍
井泉滾滾潤喉芳　井泉滾々として喉を潤して芳しからん
如今留跡有誰汲　如今跡を留むるも誰有ってか汲まん
華表猶新信仰長　華表猶ほ新たなれば信仰長し

今回の散策では町のあちらこちらに井戸のあるのが目に付いた。

昼食を摂り、大福寺へ。崖観音を見学する予定だったがここも修復中で見られず、鏡ヶ浦を眺めて駅へと向かう。鳶がたえず空を舞っている土地柄であるが、途中「鳥喫茶」があった。どんな鳥がいるのだろう。再来を期し、電車の時間を気にしながら駅へと急いだ。

南房総散策　　南房総散策

群鴟緩緩御風旋　群鴟緩々として風に御して旋り
双燕差池掠稲田　双燕差池として稲田を掠む
山裏紫藤泉井跡　山裏の紫藤　泉井の跡
幾人墨客過花前　幾人の墨客　花前を過ぐ

五級徐上忽又休　鷲野　翔堂
岩山登尽望十州　鷲野　真美

［柏梁体聯句（十一尤韻）］

五月泛天蓮峯幽　相澤　無有
碧山巌中有仏収　青木　智江
万緑如潮入双眸　秋葉　暁風
蒼天薫風山海遊　薄井　隆
安房碧天白雲浮　岡安　千尋
西南瞰島水悠悠　木村　成憲
五百羅漢到心頭　斎藤　洗鶩
用何飲尽呑海楼　清水　直美
三巓下瞰浮釣舟　清水　蕗山
摩崖磴道緑苔稠　菅原　随貞
父母音容羅漢留　菅原　有恒
鋸山新緑弄軽柔　冨樫　貞華
山道風爽観源流　長島ツタエ
険岨羅漢識学修　三好　賢司
吟友集来石佛周　芳野　禎文

鋸山下山後　吟行会参加の皆さん

館山城で

鋸山頂上で

十周年記念行事①
「自詠漢詩自書展」

千葉県漢詩連盟創立十周年記念行事の一環として七月二十八日（火）から八月二日（日）まで船橋市民ギャラリーにて「自詠漢詩自書展」が開催されました。

三十六名、五十作品が展示され、連日、漢詩談義、書道談義に花を咲かせ、当番役員もまた一人一人に詩の説明や楽しみ、書の工夫や出来栄えなど熱心に説明するなど、あっという間の六日間でした。

通算で三一八人もの方に来観していただきました。有難うございました。

作品は軸装、額装、色紙、屏風等多岐にわたり、展示も、書家が多いため手慣れたもので実にバランスの良い展示となりました。

出品者の中には日頃筆に馴染みのない会員も多く、書の腕を競う展示会ではないと納得していただき出品していただきました。

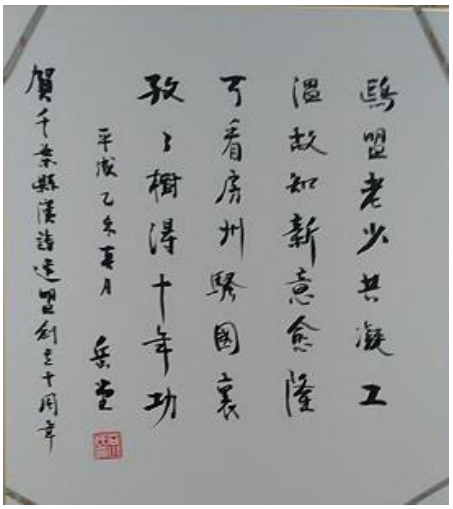
「六十年ぶりに硯を引っ張り出し、墨を磨ったが墨の香りはいいですね、小学生の頃を思い出しました」とか、「墨を磨ると気持ちが落ち着きますね」などと感想を述べておられました。またそういう方の作品は、何とも言えぬ味と人柄がにじみ出ており、来観者にも「初めて書いた書とは思えません」とか「字に勢いがありますね」などとおほめの言葉をいただき、思い切って書いた甲斐がありましたと喜んでおられたのが印象的でした。

作詩の楽しみ、書にする楽しみ、吟詠する楽しみ、観賞する楽しみ、漢詩にはいろいろな楽しみ方があるが、楽しみ方の幅を広げる良い機会になった展示会でありました。ご協力いただいた皆様に敬意を表します。

なお、九月十五日付『書道美術新聞』の「全国書展短信」の「千葉」欄に当展覧会が紹介されました。

（清水蕗山記）

【主な作品】

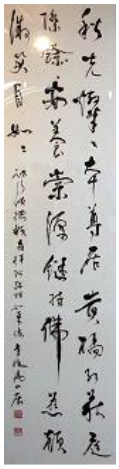


石川顧問

会場風景と参加者の皆さん

河内顧問

鷲野会長



右：杉山相談役
左：菅原事務局長

冨樫理事

○作品集はホームページに掲載されています。
どうぞご覧下さい。

十周年記念行事②
「自詠漢詩吟詠と朗読大会」

千葉県漢詩連盟創立十周年記念大会が、平成二十七年九月十二日（土）十三時より東京都立産業貿易センタービル九階にある台東区民会館特別室において開催されました。場所は、浅草寺の近くで墨水の川の音も聞えるほどの由緒ある所です。

当日は晴天にも恵まれ、出席者は五十六名を数え、来賓の方も多数列席しました。

大会は、総司会の椎名耕道理事の下に進められ、実行委員長である八嶋溪風副会長の開会の辞に始まり、鷲野翔堂会長の挨拶があり、菅原有恒事務局長から、十周年を振り返り、十周年記念行事について説明がありました。

更に、今回初めての功労者表彰がありました。今回表彰された方は、創立時の役員である杉山溪雲相談役、金子静修相談役、並びに、矢尾鏃風監事の御三方に感謝状が贈られました。

尚、感謝状は、斎藤恭子さんに書いていただきました。

次に、大会のメインテーマである、自作漢詩の朗詠・朗読プログラムが行われました。

自作漢詩の吟詠二十二名、賛助吟詠十二名、自作漢詩の朗読十名、計四十四名が参加され、日頃の精進の成果が存分に発揮されました。また、一般賛助の招待者の吟詠は、詩吟の神髄を示してくれたように思われました。

休憩の後、「漢詩づくりの面白さ」と題して、座長に鷲野会長、参加者として、宮崎三郎、薄井隆、冨樫美代子、青木智江の四氏により、座談会が行われました。漢詩づくりの苦労やむずかしさ又その妙味を披露されて、会員の今後の漢詩づくりに大いに参考になったと思われます。

最後の締めくくりは、全日本漢詩連盟会長で当連盟顧問の石川忠久先生より、「漢詩の面白さ・対句の妙味」と題して、講演が行われました。各時代の漢詩の対句について、例を挙げて講演され、ユーモアあふれる説明で、会場がわきました。

講演の後は記念写真を撮り、行事はすべて滞りなく終了しました。

夜の懇親パーティは、清水蕗山理事の下、和やかな雰囲気で行われました。この場においても、石川先生、鷲野会長、菅原事務局長による十周年賀詩の代吟が清水理事、菅野耕浪氏、八嶋副会長によって行われ、ほかにも数々の吟詠が披露されました。中でも、特別ゲストとして神風流都総連合理事長の伊森神東先生の祝吟が有り難く感ぜられました。

パーティはますます盛り上がりましたが、お開きは、八嶋実行委員長の音頭で「イヤサカ～」の三連発で、千漢連のますますの発展と皆様のご健康を祈りつつ閉会となりました。

（津田峻嶺記）

大会参加の皆さん

乾杯する石川先生と大会参加の皆さん

十周年記念行事③
石川忠久先生講演会
「漢詩の面白さ・対句の妙味」

ご講演中の石川顧問

対句というのは非常に自然な仕組みであり、右が有って左が有るので落ち着く。こういう落ち着く関係を、詩の中でどういうふうに構築していくか、汲めども尽きません。しかも、音（おん）が、音声上の効果というものがある。世界で最も優れた詩は漢詩であると言われる。紀元前十二世紀の「詩経」の頃から、紀元後の八世紀、丁度李白や杜甫の生まれた頃まで、漢詩の完成に二千年掛かっている。その間、漢詩は一度も途絶えなかった。先ず、漢詩が完成するまでの対句を見ていくこととする。最初に、「論語・為政第二」から。

学而不思則罔　学びて思わざれば則ち罔し
思而不学則殆　思いて学ばざれば則ち殆し

綺麗な対句です。こういうように詩以外の文章の中でも対句が段々作られてきて、表現が豊かになってきた。次に、話は飛んで、六朝時代の対句です。曹操の「苦寒行」、曹操は三世紀初めの人。

熊羆対我蹲　熊羆（ゆうひ）我に対して蹲（うずくま）り
虎豹夾路啼　虎豹（こひょう）路を夾（はさ）みて啼く

山を登っていく難行の様子を詠ったもの。飛び掛かろうとしている熊と羆（ひぐま）、路の両側で吼えている虎と豹、同類のもの同士が向かい合っている、如何にも恐ろしい様子。しかし、同じことを二回言っていて、初歩的な幼稚な対句です。同じ三世紀の終り頃に、阮籍が現れた。阮籍の「詠懐詩」です。

薄帷鑒明月　薄帷より明月を鑒（み）
清風吹我襟　清風我が襟を吹く

薄いとばりより明月を見、清らかな風が私の襟に吹いてくる。如何にも気持ちの良い、月明かりの夜を詠った。しかし、対句としてよくよく見ると、成程「薄帷」・「清風」は同じ構造だが、「明」と「我」は合わない。色々考えているようだが、完成度はまだまだ低い。なお、この時代は、平仄の関係は未だ有りません。張華となると阮籍より三十年ほど後、張華の「情詩」。

清風動帷簾　清風帷簾（いれん）を動かし
晨月照幽房　晨月（しんげつ）幽房を照らす

清らかな風がとばりやみすを動かし、朝の月が奥深い部屋にスーッと入ってくる。清らかな風、朝の月、非常に良く出来ている。ただ、「帷」と「簾」は並列、「幽」と「房」は垂直、と構造的には合わないが。さて、次の謝霊運は四世紀から五世紀の人、謝霊運の「始寧（しねい）の墅（しょ）に過（よぎ）る、」です。

白雲抱幽石　白雲幽石（ゆうせき）を抱き
緑篠媚清漣　緑篠（りょくしょう）清漣に媚（こ）ぶ

この人は、この時代のダントツの詩人。騒乱により中国の中心が北から南へ移る時代、社会が落ち着いてから南の方から登場してきた、素晴らしい詩人です。始寧墅は、大貴族である謝霊運の別荘。「抱く」「媚ぶ」は擬人法で、謝霊運は初めて擬人法を作り出した。片方は、雲が石を抱いている、片方は篠竹がなぎさで枝を垂らして、丁度人が媚びるように水にピチャピチャ浸かっているという、素晴らしい句です。絶唱と言ってもよい詩で、彩りも綺麗。私はこの句に打たれて、卒業論文は謝霊運を取り上げた。なお、この謝霊運の二十歳年上が陶淵明。謝霊運は、この当時のナンバー・ワンの詩人であったが、やがて、陶淵明と逆転する。それにつけても、漢字というものは素晴らしい。字に意味が有る。世界最高の文字は漢字、その素晴らしい漢字が身近に在ることを知らない人が多い。どうかこのことを再認識して、世界最高の文字

で作った漢詩を、もっと勉強して欲しい。次に謝朓、謝霊運が亡くなって三十年後に謝朓が生まれている。謝一族は大貴族で、謝朓は、一族の大先輩の謝霊運を尊敬し、また、影響も受けている。この詩がまた素晴らしい。「晩に三山に登り京邑（けいゆう）を還望（せんぼう）す」、長い詩の一部です。

余霞散成綺　余霞散じて綺（き）を成し
澄江静如練　澄江静かにして練（れん）の如し

「京邑」は南京、この頃の都で、傍らに長江が流れており、その景色を描いたもの。「余霞」は朝焼けや夕焼けのことだが、多分これは夕焼けのこと。「綺」は美しい絹織物、夕日がパーッと散って綺の如し。片方の「練」も絹織物で、澄んだ川がトローンとして練の如し、水の様子を織物にとらえたのは大発見です。前者は色が美しい、後者は静かに練り絹のように色は白、まるで絵画のようにとらえている。未完成のところもあるが、尊敬している謝霊運に負けないくらいの素晴らしい詩である。謝朓は、短い人生ながら、五世紀の詩人としては画期的な活躍をした。同じ五世紀の詩人、陶淵明の詩には、未だ「二四不同」の考えはないが、しかし、謝朓には六割有る。つまり、陶淵明亡きあと謝朓が活躍するまでの間に、中国人は音声的な配列を考え付いた。それは、自分達の言葉が音楽的であることに気付いたからであり、一つの言葉の中に、アクセントではなく抑揚が有ること、四つの声調が有ることに気付き、五世紀の末にこれを利用することとした。次は、五世紀から六世紀にかけての詩人の詩、呉均の「山中雑詩」。

山際見来煙　山際（さんさい）に来煙を見
竹中窺落日　竹中（ちくちゅう）に落日を窺う

山際に下からもやが登り、竹林の向うに夕日が見える、竹林は透（す）いているので、夕日が落ちてくるのが見通せる。来煙は下から、夕日は上から、下から上からと立体感を出している。綺麗に対をなし、平仄も合っている。音声的な配慮もして、しかも大きな表現の組合せの対句となっている。以上、対句の大きな流れがお分かりいただけたかと思う。三世紀の曹操、改めて見れば幼稚な対句だが、その後、六世紀の呉均までの三百年間で、これだけ進歩した。そうして、それまで二句ワン・セットであったが、三百年経って四句ワン・セットと考えられるようになった。これが完成したのが西暦七百年頃、丁度その頃に李白や杜甫が生まれた。李白は七〇一年、丁度間合いの良い十一年経って杜甫が生まれた。生まれたのがもう三十年早ければ、李白は李白でなく、杜甫は杜甫ではなかった。この二人、家柄や性格も何もかも違うのだけれど、しかし、不思議なことだが、世界最高の詩人二人が同時代に生まれて、しかも知り合って一緒に旅までしている。こんな例は、世界中に一つも無い。二人は遠慮の無い関係だが、十一歳の年齢差から、年下の杜甫は李白に甘え、そして、李白の良いところをしっかり取って詩を完成させた。得したのは杜甫です。李白は李白で、杜甫に別れる時に、わざわざ五言律詩を作った。李白が別れの五言律詩を作るのは珍しいことで、名家の出ではあるが若い名も無い一介の貧乏書生のために、詩を作った。元宮廷詩人の李白大先生が詩を贈っている、これは大変なことです。しかし、その後、李白はケロッと杜甫のことを忘れたらしい。一方、杜甫は、いじらしいほど李白を慕い、李白を詠った詩を十五首も作った。李白と杜甫は、世界最高の詩人です。その二人が知り合ったのは、素晴らしい偶然です。因みに、杜甫は、世界一の詩人と自覚していた。それが証拠に、当時は印刷術が無かったため、みんな一々詩を書いた。どうしてそれが残ったかというと、それを書き写していったからで、それによって紙の値段が上がる、「洛陽の紙価を高める」とはこのことです。したがって、折角作った詩でも無頓着にすると無くなってしまう。良い例が王之渙という詩人で、「黄河遠く上る白雲の間、一片の孤城万仞の山」の「涼州詞」のように、素晴らしい詩を残したが、生涯で六首しか今は残っていない。散佚してしまったのだが、これは本人が無頓着であったため。彼は、当時のナンバー・ワンの流行作家でしたが。しかし、杜甫は、一五〇〇首も残っている。これは、杜甫自身が、自分の詩は世界最高と自覚し大事にしていて、亡くなる時も、自分の息子にこのことを良く言い含めた。また、李白の詩が残っているのは、杜甫に会う前は、足かけ三年という短い期間ではあったが宮廷詩人であったから。この間に築いた名声は消えず、宮廷を追われた後に何処へ行っても、李白の詩を皆が大事にしておいてくれたために残り、亡くなってからそれらが集まった。なお、宋の時代、つまり十一世紀になると印刷術

が発明された。木版とか、これによって大量生産が可能となり、宋以降は、多くの詩が残るようになった。例えば、陸放翁は、今でも九三〇〇首残っている。唐の時代に印刷術が発達していれば、もっともっと多くの詩が残っていたと思われるが。ということで、当時、詩が残るというのは大変なことでした。

杜甫の「登高」を見ますが、この詩を作った時は五十六歳。なお、杜甫は五十九歳で亡くなっています。蜀の国を離れて、家族を連れて、都へ帰りたい思いを抱きながら、白帝城の辺りに二年間居た。この間に、四百首を作った。大変なことです。つまり、彼の人生五十九年間のうち、この五十四歳から五十六歳までのこの二年間で作った詩は、実に素晴らしい。

風急天高猿嘯哀　風急に天高くして猿の嘯（な）くこと哀し
渚清沙白鳥飛廻　渚清く沙白くして鳥飛び廻る
無辺落木蕭蕭下　無辺の落木蕭蕭として下り
不尽長江滾滾来　不尽の長江滾滾として来る
万里悲秋常作客　万里悲秋常に客となり
百年多病独登台　百年多病独り台に登る
艱難苦恨繁霜鬢　艱難苦だ恨む繁霜の鬢
潦倒新停濁酒杯　潦倒新たに停む濁酒の杯

これは何と全対格、全部綺麗な対句で、しかも読んだ後に、対句の技巧というのを余り意識させない、技術の跡が見えない。本当に熟している。緊密な対句によって構築されたこの詩、晩年の作です。当時の五十六歳と言えばもう老人で、しかも杜甫は病人でもあった。この三年後に亡くなります。白楽天は、杜甫が亡くなった二年後に生まれた。お爺さんと孫くらいの違いです。

遺愛寺鐘欹枕聴　遺愛寺の鐘は枕を欹（そばだ）てて聴き
香炉峰雪撥簾看　香炉峰の雪は簾を撥（か）げて看る

白楽天は当時、今の江西省の九江に居た。「遺愛寺」と言うお寺があり、「香炉峰」という峰があって、三字の固有名詞をうまく使った。それをうまく真似たのが菅原道真です。

都府楼纔看瓦色　都府楼は纔に瓦の色を看
観音寺只聴鐘声　観音寺は只だ鐘の声を聴く

「都府楼」と「観音寺」、これも三字の固有名詞です。ただ、よく見ると、「纔に」「只だ」の副詞は動詞を修飾するのに、この句では動詞から離れているので何となく落ち着きは悪い。この作品は、白楽天を真似しているので成程と注目されたが、独立した作品として見ると欠陥は有る。しかし、菅原道真は白楽天をよく勉強した。白楽天が亡くなる前の年に菅原道真が生まれており、入れ替わり。日本人でも、この時代にこんな素晴らしい詩を作った詩人が居たのであります。平安時代になると、次のような技巧的な作品が出てくる。都良香（みやこのよしか）の作品です。

気霽風梳新柳髪　気霽れて風は新柳の髪を梳（くしけ）ずり
氷消浪洗旧苔鬚　氷消えて浪は旧苔の鬚（ひげ）を洗う

「梳ずる」「洗う」と擬人法も揃っていて、うまいですねぇ。技巧的な句ですが、平仄もピタッと合っている。都良香は、詩を作ったわけではなく、この二句だけを作った。日本人の貴族でもこのように、対句の良さを夢中になって追求した人達も居たわけです。

（文責　宮﨑三郎）

十周年記念行事④
座談会「漢詩づくりの面白さ」

司　会：会長　鷲野翔堂【左端】
参加者：【写真左から】宮崎尚堂　青木智江　薄井蹊山　冨樫貞華の四氏

鷲野：皆さん今日は、千葉県漢詩連盟創立十周年を記念して「漢詩づくりの面白さ」ということで座談会をおこないます。皆さんのお手元には資料をお配りしておりますので参考にしてください。今回は「漢詩づくり」に焦点をあわせて全漢連等の大会に入賞入選された四人の方に話をしていただきます。先ず、配布資料にありますご自分の詩を読んでいただき、自己紹介をお願いいたします。

青木：一傘

一傘両人相与擎　一傘 両人相与に擎げ
温温晩雨触肩行　温々晩雨 肩を触れて行く
合歓花睡迂回路　合歓の花は睡る迂回の路
涓滴如簾珠玉清　涓滴は簾の如く珠玉清し

（『扶桑風韻』平成二十六年四月第十一号「優秀作品」）

六年程前に千葉に引っ越して参りましてすぐに漢詩連盟に入らせていただきました。

薄井：雨中花

陰陰雲下笑声喧　陰々たる雲下 笑声喧し
多少学童斉入門　多少の学童 斉しく門に入る
赤白青黄傘成列　赤白青黄 傘 列を成し
雨中正好百花園　雨中正に好し 百花の園

（『扶桑風韻』平成二十六年四月第十一号「優秀作品」）

千漢連に入りましてぼつぼつ五年になろうかと思います。

冨樫：山中湖畔朝望

欲拝暁光湖水前　暁光を拝せんと欲す湖水の前
風寛払霧見清漣　風は寛やかにして霧を払い
　　清漣見わる
蘸将富岳眞如画　富岳を蘸し将って真に画の如し
漸漸倒姿輝大千　漸々として倒姿 大千に輝く

（『扶桑風韻』平成二十四年度大会特別十号「入選作品」）

六年位役員としてお手伝いさせていただいております。

宮崎：隣舎紅梅

隣叟懐痾住杏林　隣叟 痾を懐きて杏林に住めば
風寒時節只孤斟　風寒の時節　只だ孤斟す
莫忘愛養紅梅樹　忘るる莫かれ愛養せし紅梅の樹
平癒君帰花色深　平癒して君帰らば花色深からん

（『扶桑風韻』平成二十六年度特別第十二号「佳作」）

千漢連の会員になりまして九年、鷲野先生に詩作りの手ほどきをいただき始めて七年経ちました。

＊＊＊＊＊＊＊

鷲野：さて、詩を読んでリラックスしたところで質問をしてみたいと思います。いじわるな質問もあるかもしれません。

今読んでいただいたのは七言絶句、中国の古典詩ですね。形が決まっていて、中国の古典詩の規則に従わなくてはいけませんよね。言葉もまた中国の古典語、いわゆる漢語を使わなければいけないですね。平仄や押韻の規則、古典語を使い古典文法に従わないといけないというように、むずかしい規則を守って詩を作るわけですが、**何でこんな難しい詩を作るのでしょうか。**なぜ日本語で作る短歌や俳句ではないのですか？

青木：漢詩の知識が全くない状態で私は石川先生の所に入門いたしました。全く分からなかったので、漢詩がこんなに難しいということも知らずに入門いたしました。始めてみて規則の煩雑さに、こんな大変なものは無いと思うようになりました。一作目の詩を作るまでに四ケ月かかりました。作ってみて、高い山をようやく登りきってやり遂げた気分になりました。石川先生は全く汚すことなく次の路を示していただいたので続けることができました。それからというものは一詩作ると、とても達成感がありました。**たとえば和歌や俳句だと、スカイツリーに登って下界を見下ろすくらいの達成感だとすれば漢詩をつくる場合は富士山に登って見下ろす達成感があったので、その気持ち良さを味わいたいと思って続けております。**今では石川先生・鷲野先生に「好好（ハオハオ）」と言ってもらえるのが一番の目標です。一年に一回くらい言っていただけたら嬉しいなと思っております。

鷲野：達成感が違うということですけれども。それでは短歌とか俳句をお作りになったことは？

青木：多少。

鷲野：そういう経験があって、なぜ漢詩に入ったのでしょうか。人と違うことをやってみたいと思ったのでしょうか？

青木：いいえ、漢詩は、仕事として必要があったので始めようと思ったのです。詩吟関係の会社で出版とかしておりますので、漢詩が解らないと全く仕事にならないのです。そう意味で習いたいと言いましたら、ある先生から、習うのだったら日本一の先生に習いなさいと石川先生を紹介していただいて、そうしましたら仕事はそっちのけで漢詩のほうが楽しくなっております。

鷲野：仕事で漢詩に触れていたということですね、そして、短歌、俳句にも触れたことがあって、漢詩に触れてみたらすごく達成感があった

ということですね。スカイツリーに登るよりも、富士山に登ったような達成感があった、と。

　薄井さんはいかがでしょうか。

薄井：私が漢詩を始めましたのは全くの偶然で、たまたま始めたということです。会社をリタイアしてブラブラしていたところ、田舎の友人が、お前暇なら漢詩をやってみないか、と声をかけてくれました。その友人は、田舎の吟社に所属していて詩を作っていたのです。漢詩はもともと好きでいろいろなものを読んだり、気に入った詩がありますと日記の片隅に記録したりして楽しんでいたのです。自分で作るものではなく、読んで楽しむものと思っていましたが、友人がやってみないかというので、それではどんなものだろうか、一回やってみようかと始めたのがきっかけでした。始めてみたらご多分にもれず、やれ平仄だ、やれ押韻だといろいろうるさいルールがありまして、何でこんな面倒くさいことを始めてしまったのだと、少し後悔したこともあったのですが、やっているうちに面白味というほどではなかったのですけれど、もう少しやれば何とかなるのではないかいうことで続けていましたら、だんだん自信が出来てきました。その友人に「続ければ俺よりうまくなる」とおだてられまして、それなら一緒に暫く続けてみようということで今日に到りました。確かに青木さんが言うとおり達成感といいますか、**私の場合クイズをやっておりまして、クイズを完成させた時の達成感というか、達成した時の高揚した気持ちが漢詩でも味わうことができまして、漢詩もなかなかいいものだなと思いました。**なぜ短歌、俳句ではなくて漢詩なのかとのいじわるな質問に対しては、私は両方ともやったことはないのですが、今考えてみるとその友人が短歌の友人であったならば短歌をやっていたのではないかと思います。そういうことで誠に偶然の結果で漢詩を始めたというのが本音のところです。

鷲野：出会いが大事なのですね！。薦めてくれる人がどういうものを薦めてくれるか、漢詩を薦めてくれたというのが大きいですね。そして作ってみて最初は嫌だったということですね、皆さんそうだったようですね、でも作っていくうちに、だんだん面白くなっていくのですね。薄井さんの場合は薦められてこの道にはいって、達成感を味わうことができたということですが、

　冨樫さんはいかがですか。

冨樫：私はある出会いがありました。唐詩選とか古文真宝とかに興味があったのですが、そのころ桜美林大学の教授でいらした石川忠久先生のＮＨＫのラジオ講座「漢詩を読む」という講座がありまして、先生がやさしい語り口でお話しされますので、夢中になってラジオにかじりついて聞いておりました。**続けているうちに、最初は解らなかったこともだんだんと解るようになりますし、漢詩で使われている漢字をひもとくことによって、こんなにも楽しいお話になるのかなぁという気持ちになりまして、どんどん漢詩に引き込まれていきました。**これが私の漢詩を作るキッカケになりまして、それから漢詩が大好きになりました。

鷲野：短歌とか俳句は？

冨樫：読んだことはありますが、作ったことはありません。漢詩がとっても楽しくて・・・

鷲野：感性が漢詩の感性と合うのでしょうね。

冨樫：そうですね、唐詩選とか読んでいましたが、なかなかそれを繙くということが出来なかったのですね。石川先生のお話を聞いているうちにほんとうに楽しくなって、出会いの歌とか、情愛の歌とか山水の歌とかそれぞれ漢字を調べながら楽しんで、漢詩に夢中になりました。

鷲野：**漢詩に興味があって、勉強したいと思っていた、石川先生のラジオ講座が背中を押してくれて、いっそう詩人のおもいが浸みこんできた、そこで又夢中になっていったということですね。出会いと、それから誰かが導いてくれる、それが大きいですよね。**

　宮﨑さんどうでしょうかね。

宮﨑：わたくしは同じ定型詩の短歌や俳句は全くやったことはないので比較は出来ないのですけれど、漢字あるいはその熟語のいわば深い豊かな世界に非常に魅力を感じております。私が漢詩を始めましたのは、生業に追われていた時期をリタイアする頃に、仕事に関係する人と酒席を持ちました際に趣味の話になりまして、相手の方が普段は気むずかしい方だったのですが、意外や意外漢詩が大好きな方でいらっしゃって、当時のＮＨＫの石川先生の講座を愛聴されているとのことで、**その時実は私の胸の奥のローソクにポッと火が点ったのです。**それから金曜日と再放送は日曜日だったと思うのですけれど、先生の講座を一生懸命に聞くようになりまして、こういう世界があったのだと何か生き返ったような感じがいたしました。後で分かったことですが、高校時代に漢文・漢詩の授

業がありまして、三年間授業を受けましたが、その時の教科書三冊だけは大事にとってありまして、今思えば、やがていずれは、という思いがあって教科書をとっておいたのではないかと思っております。

鷲野：その当時は気づかない何かがあったのでしょうね、漢文の教科書だけ残してあったという。何か引かれるものがあった、だから漢字にも興味があったのでしょうか。**四人の方のお話を聞いていますと、まず、どこかで漢文・漢詩との出会いがあったということですね。出会いが無ければそれ以降の付き合いがないわけですから。出会いがとても大事で、その時に心の琴線に触れてずっと漢詩・漢文へのおもいが埋み火のように残っていて、それが歳月を経て、宮崎さんの言葉を借りますと、心の奥にあったローソクにポッと火が点る。**そして、ローソクの火を点してくれる、さらなる出会いが必要だということになります。

＊＊＊＊＊＊

さて、皆さん漢詩を作るわけですが、どういう時に詩ができますでしょうか。自然に興が湧いてくるのかそれとも課題があっていやいやながら作るのか、どうでしょうか。感動があって詩を作るわけですが、どうやって感動を得るのでしょうか。自然に湧いてくるのか、それとも課題があって無理やり感動を起こさせようとするのか、いろいろあると思うのですけれども、その辺はどうですか。

まず薄井さんから

薄井：今先生のおっしゃるように自分が何かに感動したり、興が湧いて作るというのと、課題詩と二つあると思うのですが、やはり多いのは旅行に行った時に美しい風景を見たり、珍しい風物に触れたりした時などはやはり詩を作ろうと思いますね。それから身内にお祝い事があったり、あるいは悲しいことや不幸があったり、そういう場合も詩を作ってその方に贈ると、詩の巧拙は別としても非常に喜んでいただくということもあります。最初はいわゆる課題詩でこのテーマで詠めと言われるのは実はちょっと困ったこともありまして、そんなに詠みたいテーマでもなし、特に詩興が湧かない中でどう詠もうかと苦労したこともありましたが、**課題詩に取り組んでいるうちに、普段自分が目を向けないような事とか、そういう方向からの攻め方があるのかという、いわば新しい発見といいますか、そう感じることもできまして、課題詩で勉強することも捨て難いと思っております。**ただ、とかく課題詩は何日までに提出しなければならないという時間的制限がありまして、あまりのんびり作れないというのが困っているところです。**自分の興味に応じてあるいは感動した事に応じて作る詩と課題詩とは車の両輪のように必要なものだと考えております。**

冨樫：なかなか自然には作ろうという意欲は湧いてきませんけれど、吟行会などに行ったりしますと楽しく作れますね。**詩語を選ぼうといろんな参考書を見ても、なかなか良い詩語にぶつからないということが　多々ありますけれども、詩題をつけていただくことによってその方が作りやすいということが私にはあります。**かえって自然に湧くということはあまり無いので、薄井さんが言われたように旅行に行ったり、何か感動した事があれは忘れないうちに作っておきたいなという考えはあります。

宮崎：お恥ずかしいことを申し上げますが、私は一応の形ができるまでに非常に時間がかかりまして、全体像をデッサンする力みたいなのが非常に脆弱でありまして、従ってこの二年くらいは**意識的に課題詩を出来るだけたくさん作るようにしてきました。ところが、二年ほど経ちまして課題をこなすだけにとどまっている感がいたしまして、また詩を作っていても実感が今ひとつ薄いみたいな感じもし始めましたり**して、最近は自分で題を設定して作詩するような努力も始めたのですが、名所旧跡などは作り易いわけではありますが、しょっちゅう行っているわけではありませんので、**最近は身近な事、ちょっとした感動とか情景とか思い浮かんだ事を詩に取り上げるようにしております。**

話はそれますが、先日たまたま知ったのですが、南宋の詩人の陸游が飼い猫をテーマに詩を作っておりまして、大詩人の陸游が「猫に贈る」という題で、飼い猫を題材にして自在な詩を作っていることに驚きました。それでいいのだな、と思った次第でして。

青木：**詩というのは自分の思いを述べるのが本来の詩である**とは思うのですが、まだ表現力が足りなく、自由詩とか興が湧いて詩を作るまでに到っていません。**今は課題詩を中心に先生からいただいた課題を中心に作っていろいろと勉強しているというのが現状です。**ただ、たまに先生達から頂いた詩題に無理やり自分が感動した詩とを繋ぎ合わせて作れる場合があって、そういう時は割とすんなりと自分の心が表現

でき、先生達から褒めていただける詩が出来たりすることがあります。もっともっと勉強してそういう詩が自由に作れるようになりたいなと思っております。

鷲野：みなさん有難うございます。まあ個人によって自由詩がいい方と課題詩がいい方といらっしゃるのですね。指導する側としては、最初はやはり課題詩をやりますよね。**課題も簡単に作れるものからだんだん難しいもの、そういう詩題を選ぶようにしていますので、課題詩を一生懸命にやっていくと上達が早いと思います。その間に詩心を醸成させていく。課題詩をこなしていくうちに詩語もたくさん覚えて、いろんなことが自由に詠えるようになる、というわけです。**自由に作詩する場合も、どう表現してよいか分からない、詩語が見つからないということがあろうかと思います。

先ほどもありましたように**自分の好きな事だけ詠っていますと偏ってしまいますから、課題詩で視野を広げるという、先ほど出たように車の両輪のように学んでいくことが大切なのでしょう。**

作詩ではよく階梯という言い方がされます。階梯は階段のことですが、階段は一段一段上っていかないと上には行かれない、また一気に最上階へは行けない。作詩も同じで、課題詩をこなしながら、一方では吟行会などで興が湧いたら、それを詩にしてみるという車の両輪を回しながら、一段一段上に進むことが大切ですね。

＊＊＊＊＊＊＊

さて、詩を作ってどうでしょうか、何か変わったことがあったでしょうか。精神的あるいは生活上でどうですか。

冨樫：そうですね、一年があっという間に過ぎていくことばかりでしたけれども、**漢詩を作るようになりまして四季おりおりの楽しさを見つけるようになりました**し、花の名前も中国語では何ていうのかなあとか、季節の変わり目にたくさん詩が作れるようになりました。特に夏は難しいのですけれども、春や秋は作りやすいと思います。

鷲野：詩を作ることによって充実した毎日を送っているということですね。

宮﨑さんどうですか。

宮﨑：**春夏秋冬の四季の外に旧暦をかなり意識するようになり、一年に二十四の節気があることで、季節のとらまえ方に関心を持つようになりました。**恥ずかしいことを申し上げますが、**詩作りというのは、心を潤す効用に加えて、心を救ってくれる効用があるのかなあと思っています。**四十年も働いてきて、いわば古傷のようなものもあるわけで、ふと当時の苦い思いが脳裏に蘇がえってくることがあるのですが、そんな時には老骨の中のスイッチを漢詩の作詩モードに切り替えまして仕掛中の詩の続きに専念する。そうすると好きな漢詩のことですから気持ちがスパッと切替わりまして、気持ちが救われるということもあります。

鷲野：好きな漢詩作りに集中すると嫌な事を忘れてしまう、いいですね。漢詩の効用は絶大ですね。旧暦を意識するのもいいですね。

それでは青木さんお願いいたします。

青木：皆さんと同じように季節の移り変わり、月の満ち欠けとかいろいろ知らないことを意識するようになりました。家の中で母親（私）が辞書をたくさん並べて勉強していると、娘たちが、主人もそうですけれど、お母さんなかなかやるね、がんばっているね、と褒めてくれたことがありました。**見習わないといけないな、と時々子供にも言われるので、それも私の嬉しい一瞬です。**

鷲野：これが大事ですよね、お子さんに背中を見せるといいますか。それでお子さんが漢詩に興味をもっていただければなおいいですね。

会場の皆さんも、漢詩を作っていてお子さんやお孫さん、どうでしょうか、漢詩に興味を持ったということがありますでしょうか。

さて、薄井さんどうでしょうか。

薄井：三人の方と同じように四季の移り変わりに意識が強くなりました。今まで見過ごしていた花だとか、空の色だとか、雲の様子だとか、そういうものに敏感になったと言うことが出来ます。鷲野先生は「持つべきものは友と辞書」ということを常々おっしゃっておられますが、漢詩以外の面でも例えば新聞を読んでいたり、本を読んだり、ニュースなどを聞いているときなど、**ちょっと解らないことがあったりすると辞書を引いたり、古語辞典をみたりして調べる癖がつきました。漢詩が与えてくれたプラスの面だと思っています。**

鷲野：辞典を小まめに引くようになったと、これもいいことですね。漢詩で頭を使い、辞書を引いて指をつかい、吟行会で足を使い、「反省会」をしてお酒をいただいて、健康にはとてもいいですね。**今年のキャッチフレーズは「漢詩を作って健康になろう」としましょう。「ゆった**

り、楽しく、すこやかに」でもいいですね。

＊＊＊＊＊＊＊＊

さて、せっかく皆さんの入賞作品が資料として配られておりますので、それに触れてみたいのですが、会心の作だったのか、どうでしょうか。入賞しましたので出来がよかったと思いますが、何を表現しようとしてどこをどう苦労したのか、或いはもう少しこうしたら良かったなぁというところをご披露いただけますか。宮﨑さんどうでしょうか。

宮﨑：実はこの詩は半日程度の短い時間で作ることが出来ました。内容は実際の出来事をもとに作った詩で、同じ町内で久しくお付き合いをしているご隠居さんが入院されまして、因みに、この方の庭に見事なしだれ紅梅があり、風流な花見酒なども酌み交わしたことがありまして、**早く快癒されることを祈るような気持ちで机に向かいましたら、自分としては意外とスラスラと筆が走りました。**ただ、作後の反省ですが、気づいていなかった事がありまして、二句目の下三字の「只孤斟」という表現が、入院したご老人なのか作者なのかという質問を受けまして、実はハッとしたわけです。自戒いたしまして、**自分の詩が本当に具体的な描写になっているのか、読み手を意識して工夫してあるのか、独りよがりになっていないのかなど、出来るだけ言葉を磨くように努力していかなければというのが反省です。**

鷲野：「隣叟懐痾住杏林」というのは入院していることですからね。でも、病院で酒を飲むわけはありませんから、「風寒時節只孤斟」とあれば作者だと分かると思いますよ。ただ反省にもあったように、はっきり解るようにすれば更に言うこと無し、ということでしょうか。

宮﨑：実は、最初は「我孤斟」としたのです。しかし漢詩では「我」はあまり使わない方がいいと聞いたこともありまして、また、入院した老人が一杯やるということもないだろうと変更したわけです。

鷲野：自分の作品は後でまた見直ししますので、反省があったら次回に生かすということになりますね。早く病気が治って欲しいという真心が詩になった、いいですね。詩の本当のあり方を示しています。それでは青木さんにいきましょうか。

青木：苦労したというか、この詩に到るまでには三か月位かかりました。最初の二か月間は、**課題が「雨」ということなので、何を詠うかというのを探すのに費やしました。**島崎藤村の詩に相合い傘の詩を見つけて、これだと思いました。高校生、大学生の時の情景がふわ～と頭に浮かびまして。これを作りたいなと思いました。一番大変だったのは、雨が降っていて快適な環境ではないはずなのですが、傘の中だけは二人だけの世界で楽しい二人だけの空間になっているはずです。その情景を如何に詠おうかということにすごく時間がかかりました。万葉集とか百人一首とかいろいろなところに二人で逢うのは簾の中で逢うというのが、日本の詩にはいっぱいありまして。涓滴は簾に似ていて、涓滴の中だけは二人だけの熱い空間があるなと思い到ったことが私の一番嬉しかったところです。四句目です。「涓滴如簾珠玉清」。これを思いつき、表現できたとき、自分ながら感動を受けまして、ほかの句は割とトントンとできました。「合歓花」、ねむの木は江間細香の詩にあったので夏の詩にはピッタリだなと思い、二人きりで歩く時は遠廻りするだろうなとか、いろいろな空想が働いて、そこからは短い時間で出来ました。同じ経験をもう一回やってみたいなと思っています。いろいろな興が湧いて作りたい題材に出会えたら嬉しいなと思います。

鷲野：良く出来ていますよね。作るまでに三か月かかったという、**あるイメージが出来てそれを何とか形にしたいという執念ですね。日本の古典の教養も必要になりますし、いろんな知識を動員して作ったということですね。**もう一度経験してみたいとおっしゃったのは相合い傘で歩くというのではなく、作詩の方ですね（笑）。

それでは薄井さんにいきましょうか。

薄井：私の詩も青木さんと同じで雨という課題で作ったものです。

雨というと、元々雨が嫌いなせいもありますが、どうしても暗いイメージがあり、どうしようかと悩んでいるうちにだんだん締切も迫って来ました。その時、**たまたま起句、承句にありますように子供たちが色とりどりの傘をさしながら学校の門に入っていく光景を目にしまして、明るい雨の詩にするには丁度いいなということで飛びついて作ったのがこの詩です。**最初に出来ましたのは「雨中正好百花園」でした。雨中の傘を花に見立てたという時点でこの言葉が出まして、この結句から遡っていったわけですが、どうしてもうまくいかなかったのは、転句の傘の色の表現で、多彩だとか色とりどりの表現をどう表現するか困りました。窮余の一

策で、ずばり「赤白青黄」という風に非常にこなれていない表現をいたしまして、ここを何とかしたいなと思っていましたけれど、時間もなく提出いたしました。もし時間があったとしてもうまい表現は出来なかったのではないかと今でも思っております。

鷲野：いろいろ悩みながら纏めていったということですが、**悩んでいると偶然の助けがある、ということもよく経験することです。偶然ではなく、必然なのですがね。**「赤白青黄」、これはずばり言ったから良かったのですね。

最後に冨樫さんいかがですか。

冨樫：私はやはり一か月はかかりました。この言葉は使ってもいいのかと考える事が多くて、たとえば最後の「漸々」ですが、これはいろいろ調べて「しだいしだいに」という意味ですので、「漸漸倒姿」に決めました。「蘸し将って」の表現はどうかと思ったのですが、大漢和辞典にこの蘸す（ひたす）という字がありまして、これにしようと思いました。「輝大千」というのも何かもっと大きなものを現したいという思いがありまして、三千世界に輝くという意味で、大千に輝くといたしました。苦労して作りましたので、入選は本当に嬉しかったです。

鷲野：有難うございました。一か月かかったということで、言葉をどう選ぶかという苦労されたお話をうかがいました。それぞれすぐに出来た方と三か月かかって纏めあげた方といらっしゃいますけれど、これもテーマに合わせて題材を選んで作りこんでいくということで、それなりの苦労があるわけです。最初にもありましたように、**こうした苦労があるからこそ、出来たときの達成感が富士山に登ったときのようで、漢詩作りが楽しいということなのでしょう。**もっといろいろ聞きたいことがあるのですが、時間が無くなって来ましたのでそろそろ終わりにしたいと思います。

今回の座談会で、漢詩作りが楽しいことが伝わりましたでしょうか。苦労が多いのですがそれだけに達成感が大きい、さらに入賞入選となりますと益々嬉しいということで、これからも作詩を続けていってもらいたいと思います。これからはビシビシと。どんなに厳しいことを言ってももう辞めることはないと思いますからね（笑）。

今日お聞きの皆様も、是非、達成感を得られるように、たくさん詩を作っていただきたいと思います。感動を得るために吟行会などにも積極的に参加いただきたく、また千葉県漢詩連盟を大いに活用していただければと思います。

本日は御静聴ありがとうございました。四人の方もどうも有難うございました。

（清水蕗山記）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

[十周年記念賀詩]

賀千葉県漢詩連盟創立十周年

顧問　石川忠久

鷗盟老少共凝工　鷗盟老少　共に工を凝らす
温故知新意愈隆　温故知新　意愈いよ隆し
可看房州騒国裏　看る可し房州騒国の裏
孜孜樹得十年功　孜々樹て得たり十年の功

千葉県漢詩連盟創立十周年　会長　鷲野正明

一日恵風春忽催　一日　恵風　春忽ち催し
花香鳥語育詩才　花香　鳥語　詩才を育む
十年共錬清新句　十年共に錬る　清新の句
好更得朋伝未来　好し　更に朋を得て未来に伝へん

千葉県漢詩連盟十周年記念大会有感

副会長　八嶋溪風

一人親説風流寰　一人親しく説く風流の寰
吟儔同修吟諷玄　吟儔同に修む吟諷の玄
賦得景情任人笑　賦し得たり景情　人笑うに任す
来茲奎運夢鶯遷　来茲の奎運　鶯遷を夢む

賀千葉県漢詩連盟創立十周年　菅原　満

歳陽迎乙又巡過　歳陽乙を迎えて又た巡り過ぐ
詩会経営苦楽多　詩会の経営　苦楽多し
閨秀帥先拓蕪地　閨秀　帥先して蕪地を拓き
俊才垂範養嘉禾　俊才　垂範して嘉禾を養う
吟来卅韻柏梁句　吟じ来る　卅韻の柏梁の句
講去千篇房総歌　講じ去る　千篇の房総の歌
育得詩田金穰遍　育て得たり詩田に金穰遍し
一茎九穂是如何　一茎九穂　是れ如何

千葉県漢詩連盟創立十周年　薄井蹊山

相共琢磨迎吉辰　相共に琢磨して吉辰を迎え
百余騒客喜顔頻　百余の騒客　喜顔頻りなり
佳宵賀宴金樽酒　佳宵の賀宴　金樽の酒
発展更期心意新　発展更に期して心意新たなり

「全日本漢詩大会福岡大会」に入賞　おめでとうございます！

平成二十七年度全日本漢詩大会福岡大会が、平成二十七年十月十七日（土）に福岡県太宰府市の太宰府市中央公民館で盛大に開催されました。

全国から六二四編の漢詩が寄せられ、特別賞十二編、特別奨励賞五篇、秀作十編、佳作九編、入選二十八編、計六十四編が表彰されました。

当連盟からは、佳作に宮﨑三郎さん、入選に薄井隆さんの二名が受賞されました。

おめでとうございます！

その受賞漢詩を紹介します。

○雪中尋友　宮﨑三郎

同雲漠漠暮山横　同雲漠々　暮山横たわり
難忘青襟尋友行　青襟を忘れ難く友を尋ねて行く
前路待誰蓑笠影　前路誰をか待つ蓑笠の影
銀花開処喚吾名　銀花開く処　吾が名を喚ぶ

○懐福島故郷　薄井　隆

避難四年空日流　避難四年　空しく日流れ
帰還未復就春周　帰還未だ就らず復た春周る
寓居出戸飛鳶影　寓居戸を出ずれば飛鳶の影
借問故山花発不　借問す故山　花発きしや不や

漢詩集『房総風雅』第三集を発行しました！

千葉県漢詩連盟漢詩集の『房総風雅　第三集』を発行いたしました。千葉県の風雅を詠じた先哲の詩と顧問、会員の詩、前回より減少しましたが、四十七名の詩八十四首が掲載されています。

今後、更に充実して、次号を発行したいと思っております。次号は、五年後の十五周年記念として、平成三十二年に発行予定です。

国会図書館をはじめ千葉県内の主な図書館に寄贈されています。

今後、各市への寄贈を予定している方がおられましたら、事務局までお申し出下さい。

『房総風雅』第三集

賀房総風雅第三集発刊　鷲野正明

伝来美酒与君傾　伝来の美酒　君と傾けん
玉碗一杯千古情　玉碗一杯　千古の情
更醸新詩房総地　更に新詩を房総の地に醸し
和風相寄万花清　風に和して相寄せん万花の清きを

［トピックス①］鷲野会長がさいたまアリーナ教室で漢詩講座開催！

「漢詩を楽しむ～読むから詠むへ」

講義中の鷲野会長

漢詩を楽しむ～「読む」から「詠む」へ～

四月九日から九月十日まで六回、さいたまアリーナ六階で、鷲野会長の漢詩講座が開催されました。今回も前回と同じく学生気分で始まり、平起こりと仄起りの二首を作詩の規則を確認しながら、正に「読む」から「詠む」ように噛み砕き具体的に説明して下さいました。今回は初めて公開添削を実施下さいました。作者の意図を受け取り、作品の表現方法、推敲方法など問題点をご指導・批正して下さいました。興味深く楽しませて下さる漢詩講座でした。なお、十月から六か月間、同所で開催されます。問合せ先は、TEL　〇四八-六〇〇―〇〇九一さいたまアリーナ教室まで。　（秋葉暁子記）

千葉詩壇（到着順）

千五百羅漢　青木智江

鋸山気冷碧苔深
停杖洞前千樹森
風似経声羅漢静
常迎遊客起祈心

鋸山気冷ややかにして碧苔深し
杖を停むる洞前　千樹森たり
風は経声に似て羅漢静かに
常に遊客を迎えて祈心を起こさしむ

百尺観音　長島ツタエ

攀到鋸山塵念忘
薫風颯颯碧嵐光
忽看百尺壁崖佇
祈願平安対大洋

攀じて到る鋸山塵念を忘る
薫風颯々　嵐光碧なり
忽ち看る　百尺壁崖に佇むを
平安を祈願して大洋に対す

鋸山日本寺　木村成憲

峻磴登来臨十州
白雲接処水悠悠
全山踏破拝千仏
八十八翁心更優

峻磴登り来り十州を臨む
白雲接する処　水悠々
全山踏破して千仏を拝す
八十八翁　心更に優なり

鋸山看羅漢群　菅原随貞

摩崖磴道緑苔斑
羅漢奇岩霊洞間
千態万容風蝕耐
一嬉一怒我何顔

摩崖の磴道　緑苔斑たり
羅漢は奇岩霊洞の間
千態万容　風蝕に耐え
一は嬉び一は怒る我は何れの顔か

鋸山　清水蕗山

巨壁摩天臨海湾
白雲湧処入仙寰
山巓大鋸嘗誰振
石仏一千清且閑

巨壁天を摩し　海湾に臨む
白雲湧く処　仙寰に入る
山巓の大鋸　嘗て誰か振ふ
石仏一千　清　且　閑

館山城西望　薄井蹊山

層上倚欄望鏡湾
群鳶乱舞碧漣間
突如相競高飛処
雲表孤浮不二山

層上欄に倚りて鏡湾を望めば
群鳶乱舞す碧漣の間
突如相競いて高く飛ぶ処
雲表孤り浮かぶ不二の山

鋸山　冨樫貞華

名峰千樹緑陰滋
急峻将登歩歩遅
大仏遠見眸半眼
平和共願拝高姿

名峰千樹緑陰滋し
急峻将に登らんとして歩々遅し
大仏遠く見て眸は半眼
平和共に願うて高姿を拝す

自久里浜港向金谷港　岡安千尋

蒼海碧天相接悠
上船決背望房州
白鴎飛誘銀波起
鋸歯青山好勝遊

蒼海碧天　相接して悠なり
船に上り背を決して房州を望む
白鴎飛び誘いて銀波起こる
鋸歯の青山好し勝遊せん

遊鋸山日本寺　芳野禎文

山盈霊気緑陰新
処処聞禽全路巡
羅漢千余成列坐
遠懐名匠仏心純

山は霊気盈ちて緑陰新たなり
処処に禽を聞き全路巡る
羅漢千余　列を成して坐す
遠く懐う名匠　仏心純なるを

訪日本寺　相澤無有

奇峰気爽益清深
処処鳥啼寺塔陰
羅漢千余煩悩尽
青山寂寞紫煙森

奇峰気爽やかにして益ます清深
処々鳥は啼く寺塔の陰
羅漢千余煩悩尽き
青山寂寞　紫煙森たり

鋸山　齊藤洗鷲

森森緑樹滌塵煩
古刹尋来浄六根
羅漢一千迎我処
断崖突兀白雲奔

森々たる緑樹　塵煩を滌ぎ
古刹尋ね来れば六根浄らかなり
羅漢一千　我を迎える処
断崖突兀白雲奔る

鋸山乾坤山日本寺　菅原有恒

富峰雪白東湾碧
四遶緑黄関八州
境内巡祈羅漢仏
宛如浄土在山頭

富峰の雪は白く東湾は碧なり
四もに遶る緑黄の関八州
境内巡り祈る羅漢仏
宛も浄土の山頭に在り如し

千五百羅漢　菅原有恒

聞説奇岩霊洞祠
刻来羅漢尽生涯
匠工千仏有相似
父母温顔正在斯

聞説く　奇岩霊洞の祠
羅漢を刻し来って生涯を尽すと
匠工の千仏相い似たる有りと
父母の温顔　正に斯に在り

薬師瑠璃光如来　菅原有恒

薬壷携手施良医
万世太平心自宜
十丈偉観天下甲
最高眼界最高慈

薬壷手に携え良医を施せば
万世太平にして心自ずから宜し
十丈の偉観　天下に甲たり
最も高き眼界　最高の慈しみ

野島崎灯台　菅原有恒

遠尋房総最南端
闇迫急登灯塔欄
白日将沈虞海境
宛如極楽染朱丹

遠く尋ぬ房総の最南端
闇迫り急ぎ登って塔欄に倚れば
白日将に沈まんとす虞海境に
宛も極楽の如く朱丹に染む

［以上　鋸山館山吟行］

雨中看花　　**秋葉暁風**

破蕾花開百日紅　蕾を破り花は開く百日紅
枝頭漾漾動微風　枝頭漾々 微風動く
初孫生日新栽樹　初孫の生日 新栽の樹
今是妖姿糸雨中　今是れ妖姿 糸雨の中

弘法寺梅檀　　**長島ツタエ**

小径独行風正芳　小径独り行けば 風 正に芳し
梅檀爛漫樹梢光　梅檀 爛漫 樹梢光る
翻翻碧蝶歓娯処　翻翻たる碧蝶 歓娯の処
共楽忽看沈夕陽　共に楽しみて忽ち看る
　夕陽の沈むを

賜台湾茶　　**冨樫貞華**

団茶凝緑似真珠　団茶緑を凝らして真珠に似たり
香伴清風忽満厨　香りは清風に伴いて忽ち厨に満つ
一啜身軽千古味　一啜 身は軽ろし 千古の味
南軒独倚鳥声殊　南軒に独り倚れば鳥声殊なる

消夏雑吟　　**冨樫貞華**

熱気難堪溽暑天　熱気堪え難し溽暑の天
軽衫銷夏歩江辺　軽衫銷夏せんと江辺を歩す
晩風一脈清涼処　晩風一脈清涼の処
漾漾流蛍来眼前　漾々として流螢眼前に来たる

東皋踏青　　**菅原随貞**

独上東皋春意滋　独り東皋に上れば 春意滋し
萋萋芳草踏徐之　萋々たる芳草 踏みて徐に之く
頭冠摘作白三葉　頭冠摘み作す白三葉
欲返山巓紅靄披　返らんと欲すれば山巓 紅靄披く
（注）白三葉：白詰草・クローバー

迎傘壽有感　　**相澤無有**

勤如犬馬好風中　勤ること犬馬の如し好風の中
常戦厳寒笑貌空　常に厳寒に戦き笑貌空し
繋束已無都縦適　繋束已に無く都て縦適
敲詩傾酒不知窮　詩を敲き酒を傾け窮まるを知らず

春日庭陰　　**宮﨑尚堂**

棋敵默思心自悠　棋敵默思して心自ら悠たり
桜花爛漫午陰幽　桜花爛漫 午陰幽なり
忽然敲子芳枝慄　忽然子を敲けば芳枝慄き
紅片翻翻落局楸　紅片翻翻 局楸に落つ

初秋吟　　**北原旭峰**

唧唧新蛩入孟秋　唧唧たる新蛩 孟秋入る
山渓欲錦露華柔　山渓錦ならんと欲して露華柔かなり
今宵天上黄金月　今宵天上 黄金の月
何処桂香心自悠　何処の桂香か心自ずから悠なり

遊越南　其一会安提灯祭（ホイアンランタン）　　**柳田誼軒**

今宵祭祀月望河　今宵祭祀 月望の河
一顆真珠漾漾波　一顆の真珠 漾々の波
船上橋頭人集処　船上橋頭 人集まる処
提灯相映万光和　提灯 相い映じて万光和む

其二　会安（ホイアン）散歩　　**柳田誼軒**

四百年前架一梁　四百年前 一梁を架し
自由来往日華坊　自由に来往す日華の坊
古城得見福瀬館　古城見る得たり福瀬館
正識海辺糸路長　正に識る 海辺糸路の長きを

訪韓国済州島　　**小久保洋子**

山容如鉢草花滋　山容 鉢の如く 草花滋し
四海黒岩兼碧漪　四海 黒岩と碧漪と
満喫桃源三麗境　満喫す 桃源三麗の境
餞筵將盡鳥鳴悲　餞筵 将に尽きんとして
　鳥の鳴くこと悲し

漢詩創作講座（初級・中級）の第十期生が誕生しました！

○漢詩創作講座（中級）作品

蓮池　　**青木智江**

淡粧嬌女夕陽瀬　淡粧の嬌女夕陽の瀬
撫頬涼風絶俗塵　頬を撫す涼風 俗塵絶ゆ
遠望待君明月下　遠望君を待つ明月の下
揺揺蓮葉露香新　揺々たる蓮葉 露香新なり

入谷真源寺訪朝顔市　　**秋葉暁風**

牽牛花発梵宮晨　牽牛花発く梵宮の晨
紅白紫青無俗塵　紅白紫青 俗塵無し
正是初装如少女　正に是れ初めて装うて少女の如し
微風到処又佳人　微風到る処 又佳人

敦煌鳴沙山
風到赤沙描綺紋
丘陵赫々満炎氛
忽看泉水青青樹
穹昊無涯胡笛聞

宗谷岬
薫風行楽一閑人
草野無辺物色新
最北独来望碧海
故郷渺渺涙盈浜

遊京都
花発鳥啼京洛春
嵐山風爽属良辰
桂川渡月橋辺宿
懐古団欒三代親

日本寺大仏
鋸山絶俗浄無邪
石仏摩天開万花
合掌低頭人不去
慈光盎盎白雲斜

湖上秋月
一望湖面水波平
欲上小舟漣忽生
正好今宵三五月
流光独泛載秋行

岡安千尋
風到りて赤沙 綺紋を描く
丘陵赫々として炎氛満つ
忽ち看る 泉水 青々の樹
穹昊涯無し 笛を聞く

小澤州風
薫風に行楽す一閑人
草野無辺 物色新たなり
最北独り来り碧海を望めば
故郷渺々 涙 浜に盈つ

木村成憲
花発き鳥啼く京洛の春
嵐山風爽やかにして良辰に属す
桂川渡月橋辺の宿
懐古団欒す三代の親

齋藤洗鶩
鋸山俗を絶ち浄くして邪無し
石仏天を摩し万花開く
掌を合わせ頭を低れて人去らず
慈光盎々　白雲斜めなり

芳野禎文
一望す　湖面の水波平らかなるを
小舟に上らんと欲すれば漣
忽ち生ず
正に好し今宵の三五の月
流光独り泛び秋を載せて行く

○漢詩創作講座（初級）作品

林中閑歩
清風習習故林巡
巨樹森然爽気新
蝴蝶一双花上舞
悠悠信歩楽閑身

盛夏即事
房総溽暑赤烏狂
満樹群蝉声愈長
閑坐北窓磨古墨
幽香満室自清涼

坂田池
池辺信歩午風軽
桃李菜花相競生
忽渇一亭茶飲処
瓶中数朶水仙清

尋鈴虫寺
尋来日午古禪宮
法話停時俗念空
身泰心寧清浄境
煎茶一啜忽聴虫

井上夏央里
清風習々　故林を巡る
巨樹森然として爽気新たなり
蝴蝶一双　花上に舞ふ
悠々　歩に信せて閑身を楽しむ

加藤　武
房総の溽暑　赤烏狂ふ
満樹の群蝉　声愈いよ長し
閑かに北窓に坐して古墨を磨せば
幽香室に満ちて自ずから清涼

菊田聖山
池辺　歩に信せば午風軽し
桃李菜花　相競って生ず
忽ち渇いて一亭　茶飲む処
瓶中　数朶　水仙清し

小久保洋子
尋ね来たる日午　古禪の宮
法話停む時　俗念空し
身は泰く心は寧し清浄の境
煎茶一啜　忽ち虫を聴く

林中閑歩
閑人漫歩雨初収
嫩草萋萋新緑浮
嫋嫋林風心氣爽
仰天忽見白雲流

林中閑歩
春聴度梢郭公轉
秋看舞天紅葉追
日変故林閑歩楽
明晨風致有誰知

林中閑歩
薫風習習絶塵縁
新緑成陰景物鮮
清昼無人花自発
鳥声恰恰白雲辺

林中閑歩
暁来独歩緑陰深
側耳幹中流水音
生命未知全道理
清風颯颯洗塵心

雨中送春
小斎独坐読書親
細雨瀟瀟軒滴頻
忽聴鳥声開戸牖
紅飛紫散已徂春

坂本光正
閑人漫ろに歩めば雨初めて
収まる
嫩草萋々　新緑浮かぶ
嫋々たる林風　心気爽やかに
天を仰げば忽ち見る　白雲の
流るるを

菅原随貞
春は聴く梢を度って郭公の轉るを
秋は看る天を舞って紅葉の追うを
日び変わる故林　閑歩の楽しみ
明晨の風致　誰か知る有らん

田中基治
薫風習々　塵縁を絶ち
新緑陰を成して景物鮮やかなり
清昼人無く花自ずから発き
鳥声恰々たり白雲の辺

長島ツタエ
暁来独り歩めば緑陰深し
耳を側だつれば幹中流水の音
生命未だ知らず全ての道理
清風颯々　塵心を洗う

根津静男
小斎独り坐し読書に親しむ
細雨瀟々　軒滴頻りなり
忽ち鳥声を聴いて戸牖を開けば
紅は飛び紫は散じ已に徂春

林中閑歩　　**宮本美恵子**

幽邃独行杖履軽　幽邃　独り行きて杖履軽し
薫風動処緑新生　薫風動く処　緑新たに生ず
百花漸散鶯声好　百花漸く散じて鶯声好し
相競山中蜀魄鳴　相競って山中　蜀魄鳴く

林中閑歩　　**森崎直武**

閑人早暁独探香　閑人早暁独り香を探る
処処鳥声余韻長　処々の鳥声　余韻長し
夏立桜花都散尽　夏立てば桜花都て散じ尽くし
薫風習習送清涼　薫風習々　清涼を送る

第十一期漢詩創作講座のご案内

○初級漢詩創作講座

●対象者：漢詩作りは初めての方、或はもう一度勉強し直してみようとお考えの方の為の講座

会員でない方も大いに歓迎しますので、是非お誘い下さい！

●期間：十一月十五日から五ヶ月間
●月一回第三日曜日十二時三十分から三時
●場所：船橋中央公民館
●講師：漢詩研究会参加理事
　特別講師：鷲野会長（国士舘大学教授）
　　但し最終回のみ
●費用：受講料五千円
●なお、会場に来られない方のために、通信講座を設けました。お申し込みの方は、詩稿を郵便または、ＦＡＸにてお送りください。

○中級漢詩創作講座

●対象者：千葉県漢詩連盟の会員に限る。
●漢詩作りの経験がある方、或は投稿してみようとお考えの方の為の講座
●期間：十一月十九日から五ヶ月間
　月一回第三木曜日午後三時から六時
●場所：初級に同じ
●講師：鷲野会長（国士舘大学教授）
●費用：受講料一万円

●申込方法：初級・中級とも、同封の参加申込書を事務局宛に送付してください。受講料は講座初日に持参下さい。振込しない事！

●なお、中級以上の方で、会場に来られない方は、直接、会長に批正していただけます。投稿規定参照。

お問合せは事務局（清水）まで

会　員　便　り

故中村八壽男氏の最後の漢詩

中村初枝（ご令室）様から、当連盟のお悔やみに対して、左記の書状が届きましたので、ご紹介させていただきます。

この度は、中村逝去に際しまして、ご懇切な弔意のお手紙を賜りまして厚く御礼申し上げます。

千葉県漢詩連盟の皆様には大変お世話になりました事を、中村になりかわりまして生前のご厚情に深謝申し上げます。

中村が書き残した一文がございますが、書き加えさせていただきます。

「昔、大阪在住の折、吉野山に桜を見に行きましたが、山中の如意輪寺に刻まれた楠木正行（小南公）の辞世の句が印象に残っていたので、私の今の心境を正行にあやかり漢詩創作した詩です。

一病臥述懐　七月十七日

吉野山門古梵宮　吉野山門　古梵宮
門扉記句小南公　門扉句を記す小南公
庶希死後留名字　庶希くば死後　名字を留めん
我命将消心意同　我命将に消えんとして心意同じ

余命を宣告されましたが、心境は清々です。その時が来ても乱れることの無いように準備しておこうと思います」と記されております　生前のご厚誼に感謝申し上げ、今後ともよろしくご指導をいただきますようお願い申し上げます。

息子たちの力を借りて歩を進めてまいりたいと思います。

中村初枝

なお、事務局から、中村さんへ、左記のような弔詩をお届けいたしました。

哀悼中村八壽男先生　　菅原有恒

訃見同雲卯月晨　訃り見る同雲　卯月の晨
疑聞噩報是何真　疑い聞く噩報　是何ぞ真なる
近來臥病不休賦　近来　病に臥すも賦すこと休めず
筆健氣豪風雅人　筆健にして気豪たる風雅の人

［トピックス②］

鷲野会長が東邦大学で漢詩講座を開催されました！

鷲野会長による東邦大学理学部市民講座「漢詩を楽しむ」が、八月二十五日から五日間、同校習志野キャンパスで開かれました。昨年の第一回の講座が大変に好評だったために、今年も引き続いて開催されたものです。定員も昨年より大幅に増やし、百名超の受講生が熱心に聴講しました。

初日は「夏の詩」、二日目は「花の詩」、以下「白居易の詩」、「蘇軾の詩」、「日本漢詩」と非常にバラエティに富んだ内容でした。漢詩だけでなくその周辺の話題まで多角的に盛り込んだ講義は誠に興味深く、二時間は忽ちのうちに経ってしまいました。特に白居易と蘇軾の項では夫々の生涯や人生観などを詳しく解説して戴き、作品を鑑賞する上で大いに参考になりました。

このような素晴らしい講座を聴いて、それだけで終わってしまうのは実に勿体ない話です。受講者の中には千漢連に関心を持った人もいたようですが、これを機に新会員が増えることを切に願いながら霧雨のキャンパスを後にしました。

（薄井　記）

［トピックス③］鷲野会長がNHK・Eテレに出演されました！

ＴＶ出演中の鷲野会長

平成二十七年十月三日（火）、「吟詠・月によせて」と題して、吟詠する「和歌・漢詩」の内容について、わかりやすく、簡明に解説されました。

（菅原記）

近著紹介

●顧問　石川忠久著『茶を詠う詩』―『詠茶詩録』詳解（研文出版、二〇一一年五月発行）

●顧問　石川忠久著『江都晴景―わが心の詩』（研文出版、二〇一二年四月発行）

●顧問　**石川忠久補『平仄字典』（林古溪編）（明治書院、二〇一三年一月発行）**

●会長　鷲野正明著『初めての漢詩創作』（白帝社、二〇〇五年九月発行）

●会長　**鷲野正明著『漢詩集 花風水月』（平電子、二〇一一年五月刊行）**

◎千葉県漢詩連盟編 漢詩集『房総風雅』第三集（二〇一五年六月発行）

◎千葉県漢詩連盟編 漢詩抄『千葉詩藻』第二号（二〇一三年三月発行）

全日本漢詩連盟短信

○全日本漢詩大会福岡大会

日時：平成27年十月十七日（土）

場所：福岡県太宰府市 太宰府中央公民館

●「富士山漢詩コンクール」が静岡県主催、全日本漢詩連盟後援で開催されます。

平成二十八年二月二十三日に、入賞・入選した作品を掲載した作品集が出版されます。

年会費未納の皆様へ！

平成二十七年度年会費納入のお願い

未だ納めておられない方は、年会費（千五百円）の送金を左記口座にお振込願います。

なお、前年平成二十六年度年会費を未納の方は、二年分（三千円）をご送金下さい。

①ゆうちょ銀行のＡＴＭで自分名義の通帳から、「千葉県漢詩連盟」の口座（記号一〇五五〇-番号七三一六一二五一）へ機械の指示通りに送金すると今のところ送料が無料です。

②窓口で現金を出して送金を依頼すると、別途手数料がかかりますのでご注意下さい。

ＡＴＭのやりかたがわからない時は、ゆうちょ銀行の係りの人にお尋ね下さい。

尚、三年間未納の方は当月末日を以って自動退会とさせていただきます。

千漢連　今後の予定

○第二十八回研修会（梁川星巌・第十二回）
日時：十二月三日（木）十五時―十八時
場所：船橋中央公民館

○第二十九回研修会兼新年会
（特別講師　国士舘大学　松野敏之先生）
日時：平成28年二月十一日（木・祝日）十時
場所：未定

以上　今回の会報に案内状を同封してありますので、出欠のご返信を必ずお願いします。

○第三回中国台湾吟行会（台湾東部）
日時：平成28年三月二十二日（火）
～二十六日（土）

□『千葉詩藻』第三号発行
発行：平成28年三月十二日（土）
なお、千漢連漢詩抄『千葉詩藻』の原稿は十一月二十日までに！

投稿規定

会員の所属する団体の紹介、会員著書の紹介、漢詩の投稿、千葉県の先哲の漢詩・詩碑等の紹介など事務局へご連絡下さい。

「千葉詩壇」へ奮って作品を投稿して下さい。

なお、締切日は、二月末または八月末です。

投稿は、毎号一人絶句二首（律詩一首）とし、会長による批正が行われることがあります。

なお、会報掲載以外に、会長の添削をご希望の方は、一首につき一千円を納入の上、返信用封筒を同封し、事務局までお送り下さい。

会員動向

＊入会者＊平　正路（斯文会）田中基次、河野茂治、小嶋　明紀子、根津静男、坂本光正（以上個人）以上六名

＊逝去者＊中村八壽男（菜の花漢詩会）
謹んで哀悼の意を表します。合掌

＊退会者＊石井隆也、須藤清人、長坂　孟、宮川敏彦　以上四名
長い間ありがとうございました。

・会員数：九十八名（平成二十六年十月二十二日現在）

編集後記

会報二十一号を送ります。

今回は十周年記念行事が満載です。石川先生の「漢詩の面白さ・対句の妙さ」、鷲野会長の「漢詩の楽しみ・漢詩鑑賞」、そして千漢連ならではの座談会「漢詩づくりの面白さ」の講演録を載せました。聴いては勿論楽しかったわけですが、読んでも楽しいものがあります。

また、ホームページも四月から開設しました。アドレスはヘッダーにも記載しています。

一番おもしろく、楽しめるホームページです。

http://chibakanshi.com/

会員も最近百人を切っております。目標の会員数百五十人に向けて、会員皆様一人一人の口コミを宜しくお願い致します。

なお、今回は、「人間至宝の生き方への箴言集『酔古堂剣掃』を読む」（清水蕗山）と「平仄の考察」（菅原有恒）は休みます。

（菅原記）

連絡先・入会申込先

・千葉県漢詩連盟事務局
事務局長　菅原有恒方
〒276-0023　八千代市勝田台二-二七-二
電話＆ＦＡＸ　〇四七-四八四-九三三五
・振込銀行：ゆうちょ銀行
・口座番号：一〇五五〇-七三一六一二五一
・口座名：千葉県漢詩連盟
・なお、入会をご希望の方がおられましたら、事務局までご連絡下さい。